幼児とむし歯 (その3)

三笠友紀彦
(夙川学院短期大学)

はじめに

子ども達のむし歯罹患率が減少傾向にあるといっても、健康診断結果のはるかトップクラスに位置しており、甘い食品が増加している現状からみても、少しも復を振くことができない疾病である。

過去、第30回・31回大会において、幼児のむし歯について生活環境の面から調査をし、むし歯予防の有効な手段として次のような結果を得た。①1歳6ヶ月～2歳ぐらいの間に何らかの方法で歯を清潔にし始めることを心がける。②歯の清潔(みがく・うがい等)については、大人が口腔内をみて、手助けをする(子どもだけにまかせておかない)。③甘い食品摂取とむし歯数は比例する。特に母親の嗜好が影響をおよぼしている。④乳歯のむし歯は早期発見、早期治療によって増加を防止できる(いづれ生え変わるのだからと放置しておく、とどんどんむし歯が増加する)。

この幼児達も現在は12～14歳になっており永久歯列が完成する年齢でもある。そこで、昭和52年当時の乳歯のむし歯の状況が、現在の永久歯にどのように影響をおよぼすのか、調査することによって、今後の指導に役立てたい。

調査の方法

対象 昭和46年4月2日～48年4月1日生れの小学生・中学生316名(前回と同一被検者)

方法 質問紙法(各家庭に郵送)

日時 昭和60年1月～3月

調査内容および集計項目

- 永久歯のむし歯の現状
- 永久歯と乳歯のかかわり
 - ・罹患率について
 - ・清潔習慣について
 - ・甘い食品の好悪度
 - ・親の意識について
 - ・治療について
 - ・間食について
 - ・偏食について
 - ・親の歯について

結果および考察

前回の調査では乳歯の平均罹患率は86%であった。今回の永久歯は70%である。また、女子の方が男子より罹患率は有意な差で高かった。

【グラフ1】より、永久歯と乳歯のむし歯罹患率の傾向は比例する。すなわち、乳歯の時、むし歯0本だったものは永久歯になっても0本が多く、多数あったものは永久歯になっても多数ある。これは長きにつけ、

長きにつけ、摂取食品や清潔習慣等、子どもの生活環境とかがわりを待つものであろう。

また、少数ではあるがこれらの逆の状態、すなわち、乳歯ではむし歯0本だったのに、永久歯では9本以上もある。また、乳歯でむし歯9本以上あったのに、永久歯では0本である。と、いった状態はどのような影響によるものかについても考察していく必要がある。

【グラフ1】

乳歯および永久歯のむし歯%

永久歯 ↓ 乳歯→	(0本)	(1~2本)	(3~4本)	(5~8本)	(9本以上)
0本	32	21	14	19	14
1~2本	20	24	14	30	12
3~4本	16	18	28	23	15
5本以上	5	6	19	4	1

p<0.05

むし歯があるとわかった場合の治療に対する態度と、むし歯保有数のかかわりは、【グラフ2】より、むし歯保有数が多いものほど痛くなってから治療に行くという傾向が出ており、これは前回の調査と似たような傾向である。今回は永久歯であるので、治療していないというものはほとんどなかったが、早期治療はむし歯増加防止の近道である。

【グラフ2】

永久歯の治療とむし歯%

	(すぐ治療する)	(しみてからする)	(痛くなってからする)	(しない)
1~2本	68	17	12	3
3~4本	55	20	25	0
5本以上	44	21	33	0

p<0.05

清潔の習慣とむし歯罹患率は前回と同様、歯をみがく時間などは、むし歯の有無による差はなかった。

次に間食についてであるが、乳歯の時、むし歯0本で永久歯になって、むし歯があると回答したもののうち、40%が間食をよくするという結果であった。〔表1〕これは、間食がむし歯形成の一要因であることを裏づけるものであろう。間食をする時間は年齢の増加とともに、決めているから、いよいよ移行しており、ガラガラ食いの状態になっていると思われる。また、清潔の習慣では間食後のみがさは5%と低い値を示しており、これも問題である。

間食の内容については、やはり甘い食品の好嫌度とかがわってくる。乳歯の時0本で、永久歯になってむし歯が有るものでは、「よく甘食をし甘い食品が好き」と回答したものが60%弱であった。また、この逆に、乳歯の時9本以上むし歯があったが、永久歯のむし歯が0本で、「よく間食するが甘い食品は嫌い」と回答したものが40%あった。このように甘い食品と間食が結びつくところに、むし歯が発生するものであると考えられる。〔表1〕

間食の状態 (乳歯のむし歯0本だったもの)

永久歯のむし歯	間食	しない	普通	する
なし		22.6	57.1	25.8
あり		26.7	33.3	40.0

さらに就寝前の間食についてであるが、全体の3分の2は就寝前に間食をしないと回答しているが、しかし、永久歯のむし歯5本以上のものの4分の1は就寝前に間食すると回答しており、むし歯と就寝前の間食とは、有意な差がみられる。

〔グラフ3〕より、食品の好き嫌いとうし歯については、52年の調査より永久歯のむし歯保有者が多いほど、幼児期に好き嫌いがあると回答しているものが多いという傾向がみられた。

〔グラフ3〕 幼児期の食品の好嫌度と永久歯のむし歯

永久歯のむし歯	好き嫌いなし	普通	あり%
0本	21		18
1~2本	20		9
3~4本	11		21
5本以上	10		30

子どものむし歯に対する養育者(親)の意識として、
 ○歯に対する関心度、○歯の清潔に対する注意度、
 ○間食に対する注意度、○栄養の配慮等を調査したが、いづれも、むし歯の有無との関連はみられなかった。

両親のむし歯

父親のむし歯と子どものむし歯との関連はほとんどみられなかった。しかし、〔グラフ4〕より、母親のむし歯とは有意な傾向がみられた。すなわち、母親のむし歯が多いと、子どものむし歯も多いという傾向である。ほとんどの母親は家庭内での調理に関与しており、食事の嗜好からおやつまで、子どもは、母親の影響を受けやすい立場にあることから、うかがえる。これは乳歯のむし歯の状態も同様であった。

〔グラフ4〕

母親のむし歯と子どものむし歯

母親 →	多い	普通	少ない	%
0本	30	31	39	
1~2本	32	31	37	
3~4本	26	45	29	
5本以上	54	30	16	$p < 0.05$

まとめ

- ①乳歯のむし歯の傾向がそのまま永久歯にもおよんでいるので、乳歯をおろそかにしないこと。
- ②永久歯は乳歯ほどむし歯の蔓延率が高くないが、早期発見・早期治療を励行すること。
- ③甘い食品の摂取を少なくする。
- ④原則的には間食をしない方がよいが、する場合はガラガラ食いをしない、食べたら口腔内を清潔にする習慣をつける。
- ⑤就寝前に間食をしない。
- ⑥幼児期の食品の好き嫌いとうし歯保有とは関連があると考えられる。

以上のことから、子どものむし歯は日常生活の中で、規則正しい生活習慣を身につけることによって、守ることができる。

いかにいっても、小学生・中学生といえども母親の配慮いかんが、むし歯を助長させるか、減少させることになる。